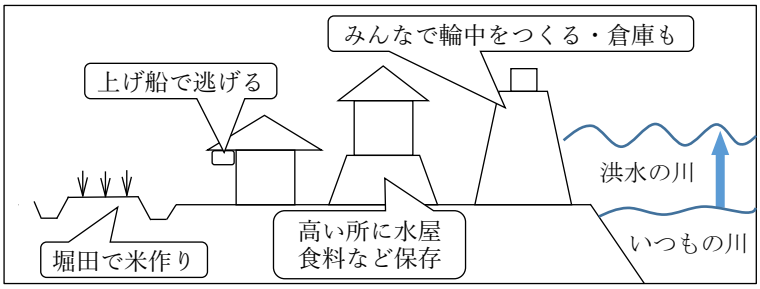
リモート授業指導案（輪中の話）

ねらい

水害に苦しむ海津の人々が、どのように命や生活を守ろうとしたのかを考えるリモート授業を通して、集落ごとの輪中の建設や水屋・上げ船の設置、堀田での米作りなど、様々な工夫を行っていたことに気づき、水害の多い地域でも人々が苦心や努力を重ねることで生活を向上させようとしていたことを理解することができる。

本時の展開（１／１）

過程	主な学習活動	指導・援助
つかむ	**１　博物館資料「輪中の分布」と「洪水で沈んだ町」から課題を設定する** ・海津は長良川と木曽川、揖斐川の３つの大きな川に挟まれていて、小さな島が集まっているみたい。 ・洪水が起きると家の二階まで水がきて大変だ。	○博物館資料「顔戸南遺跡の堤（古墳時代）」を通して、大昔から洪水が人々の命や生活を奪う恐ろしいものであったことを押さえる。
	水害に苦しむ海津の人々は、どのような工夫をして命や生活を守ってきたのだろうか。	
見いだす	**２　解説員のガイドをもとにして、水害に苦しむ海津の人々の工夫をワークシートに書き込む** **＜解説員の話＞** ①輪中…「**集落を囲むような堤防**」 博物館資料→「輪中の分布」（拡大して提示） ・最大高さ７ｍほどの堤防で集落を囲む ・「輪」の「中」に暮らす人々が、協力し合って堤防を築いた。 ・堤防の上には「郷倉（水防倉庫）」や、土を高く盛った「助命壇」があった。 ②堀田…「**低地でも米作りができる堀田**」 博物館資料→「輪中の断面図模型」 ・水がたまりやすい低地でも地面に凹凸をつけることで米作りが可能になる。 ③家屋…「**水屋や上げ船で洪水対策**」 博物館資料→「輪中の断面図模型」 ・水に浸からないように石垣の上に家を建て、避難できるように船が用意してある。また、避難用に食料なども準備してある。 ・家の周りに木を植えて水の勢いを弱める。	○輪中や堀田の建設には多くの労力が必要であり、人々が協力しながら時間をかけて進めてきたことを押さえる。 ○洪水の多い土地に人々が住み続けてきた理由の一つとして、洪水によって栄養のある肥沃な土が運ばれてきて、作物が育ちやすい面もあることを伝える。 ○解説の最後に博物館資料「輪中の断面図模型」を使って洪水時の様子を再現し、様々な工夫が有効に機能していることを実感させる。
まとめる	**３　人々の工夫を絵や言葉でまとめる**  	○分かった工夫を言葉だけでなく絵でも表現できるワークシートを活用する。
	４　振り返りと次時への見通し 水害の多い海津の人々は、様々な工夫をして被害を防いで生活していた。それでもまだ水害は続いている。誰が、どのような取り組みをしていったのか調べていきたい。	○様々な対策をしても洪水の被害が減らない状態（資料「堤防の破壊回数の推移」）を提示し、平田靭負やヨハネス・デ・レイケにつなげる。